

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制



社会貢献

私たちの社会は、地球温暖化やエネルギー問題、人口爆発、貧困などさまざまな課題に直面しています。将来の世代がいつまでも豊かさを享受できるようにするには、社会全体が力を合わせて、こうした課題を解決しなければなりません。企業も社会の一員として担うべき役割があり、多くのステークホルダーから社会課題解決への貢献を期待されています。日産は、自動車メーカーとして魅力ある製品やサービスを世界中の人々に提供することに加えて、コミュニティの一員として主体的に社会にかかわり貢献することも、企業の重要な使命だと考えます。

企業がさまざまな資源を地域社会に提供し、コミュニティの活性化や課題

の解決に積極的に参画することは、企業市民としての責務を果たすというだけでなく、企業活動にとっても有益であり、より良い事業環境や持続的に成長する市場を生み出すことにつながります。

日産は、複雑化する社会課題に対応するため、非営利組織（NGO・NPO）や行政などさまざまなステークホルダーと連携し、相互の強みを生かしながら活動を展開しています。こうした社会貢献活動の方針をグローバルに共有するとともに、国や地域により異なるニーズに対応するため、各国の事業拠点や関連会社による独自の取り組みも行っています。

グローバル社会貢献支出額
(2014年度/寄付金・協賛金を含む)

18億円

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

社会貢献

CSRスコアカード

2014年度目標に対する達成度 ✓✓:達成 ✓:ほぼ達成 ×:未達成

年間を通じたCSR推進の管理ツールとして「CSRスコアカード」を作成して、「サステナビリティ戦略」ごとの活動の進捗状況を確認し、レビューを行っています。ここでは「CSRスコアカード」のうち、日産が現在実行している事業活動の価値観や管理指標についてご紹介します。

取り組みの柱	目標	進捗確認指標	2013年度実績	2014年度実績	評価	次年度以降の取り組み	長期ビジョン
環境への配慮	環境教育プログラムの実施により将来世代の環境問題への理解を促進する	プログラムの継続の実施、地域拡大	<ul style="list-style-type: none"> ●環境教育プログラムの地域拡大（日本） ●環境教育パイロットプログラムの実施（英国） 	<ul style="list-style-type: none"> ●継続実施（日本） ●中国・欧州で実施 	✓✓	<ul style="list-style-type: none"> ●日本での継続的な実施を拡充する ●各リージョンと連携し、順次実施国・地域を拡大する 	<ul style="list-style-type: none"> ●グローバルに事業を営む企業として、事業の発展とともに地域の発展に貢献する ●「環境への配慮」「教育」「人道支援」の3分野を中心に、自社の強みやリソースを最大限活用し活動に取り組む ●グローバルな考え方と各地域に最適な活動のバランスをとる
教育	教育を「次世代への投資」と位置づけ、子供や若者の支援を中心に教育プログラムを実施する		<ul style="list-style-type: none"> ●出張授業プログラムの実施国拡大（メキシコ、英国） 	<ul style="list-style-type: none"> ●「日産モノづくりキャラバン」の実施国拡大（中国・英国） ●新たな教育プログラムの導入（英国・インドネシア） 	✓✓	<ul style="list-style-type: none"> ●各リージョンと連携し、実施国・地域を拡大する ●各国の社会課題に応じて活動内容を検討し、実施する 	
人道支援	自然災害被災地への迅速な支援を行う 国際NGOハビタット・フォー・ヒューマニティと協働で活動を実施する	現地のニーズを的確に把握しタイムリーに支援を行う プログラムの継続の実施、地域拡大	<ul style="list-style-type: none"> ●災害支援プロセスを整理し、日米欧の担当者間で共有 ●東日本大震災被災地への支援を継続（従業員によるボランティア活動、「日産プレジデント基金」） 	<ul style="list-style-type: none"> ●雲南省地震、広島市大雨災害、エボラ出血熱への支援 ●東日本大震災被災地への支援を継続（従業員によるボランティア活動、「日産プレジデント基金」、車両寄贈） 	✓✓	<ul style="list-style-type: none"> ●意思決定および対応をさらに迅速化する ●各リージョン・機能の連携を強化する ●2000年に採択された「ミレニアム開発目標（MDGs）」が2015年に期限を迎えることを受け、次の開発目標となる「ポスト2015」を視野に入れた取り組みを検討する 	

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

社会貢献への取り組み

日産は、社会貢献活動として「環境への配慮」「教育」そして「人道支援」の3分野に重点的に取り組むことを定め、金銭的な支援だけでなく、自動車メーカーとしての知識や専門技術、自社製品、関連施設の活用など、日産が事業を通じて培った資源を十分に生かすことにより、独自性の高い活動を実施しています。

また、より実効性の高い活動を行うため、活動分野において高い知見と専門性を持つ非営利組織(NGO・NPO)との対話を重視しています。

多くの従業員が社会に関心を持ち、活動に自発的に参加できるように、従業員の社会貢献活動をサポートしています。

事業を営む地域への貢献



推進体制

日産の社会貢献活動方針は、日産グローバル本社(日本)のCSR部が策定します。エグゼクティブ・コミッティ¹⁾等で議論・決定された方針はグローバルに共有され、各国・地域の活動もこの方針に沿って実行されます。

▶ エグゼクティブ・コミッティの詳細を掲載しています
▶▶ page_14

環境への配慮

日産は、環境理念「人とクルマと自然の共生」を掲げ、環境負荷削減に意欲的に取り組んでいます。社会貢献活動においても「環境」への取り組みが重要であると考え、地球環境問題への理解を深める教育プログラムの実施、低炭素社会の実現に向けた基礎研究の奨励といった活動に取り組んでいます。

日産の特色を生かした環境出張授業(日本)

日本では、製造業ならではのノウハウを生かした3種類の体験型教育プログラムを2007年から実施しています。いずれも小学校高学年の児童を対象に、日産従業員が講師となって学校を訪問し行います。そのひとつである「日産わくわくエコスクール」²⁾は、地球環境問題への理解を深めるとともに、日産の環境への取り組みを紹介し、100%電気自動車「日産リーフ」の試乗などを通

▶ 「日産わくわくエコスクール」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶▶ website

じて最新の環境技術を体験するプログラムです。授業内容はNPO気象キャスターネットワークと協働でつくり上げ、同NPOは講師として授業運営にも参加しています。

好評に応じて日本国内での実施回数を増やし、2014年度は神奈川県を中心に60校、イベントへの出展等を合わせると約6,000名の児童が受講。開始以来、同プログラムの日本国内での受講者数は累計で約3万1,000名に上ります(2015年3月末現在)。

また、日本だけでなく英国でも、英国日産自動車製造会社(NMUK)が地元小学校の児童を対象に同プログラムを実施しています。

地域の環境保全活動をサポート(米国)

テネシー州中央部に位置するハーペス川は多様なユニークな生態系を有し、テネシー州の景観保護指定を受けています。2014年9月、日産は、ハーペス川とその支流の生態系を保全するため、地域や州レベルでの水政策に対し、科学およびその他の専門知識を提供しているハーペスリバー・ウォーターシェッド・アソシエーション(HRWA)に5万ドルを提供しました。日産の提供する資金は、水質を持続的に改善するHRWAのプログラムに活用され、約1,600kmにも及ぶハーペス川支流の環境保護に貢献します。

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

教育

日産は、将来世代を担う子供や若者を支援することは「未来への投資」と考えます。より良い未来へと続く扉に誰もがアクセスできる社会を実現するために、事業で培った知識や技術を活用した教育プログラムの実施や、新興国における初等教育の機会提供といった活動に取り組んでいます。

「子供と本」を通じた取り組み

(日本、ポルトガル、米国、インドネシア)

日本では、創作童話と絵本のコンテスト「日産童話と絵本のグランプリ」を1984年から実施しています。同グランプリでは、大賞を受賞した作品を出版し、全国の図書館や事業所近隣の幼稚園・保育園に届ける活動を継続。これまでに20万冊以上の本を寄贈してきました(2015年3月末現在)。2012年には、日産イベリア自動車会社(NIBSA)がポルトガルで同様のコンテストを創設しました。行政の協力を得て、同国内の学校を通じて才能ある新進作家を発掘し、出版の機会を提供するプログラムです。

▶ 「日産童話と絵本のグランプリ」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶ website

また、米国では、北米日産会社(NNA)が本社を置くテネシー州において「ガバナーズ・ブックス・フロム・バース基金」や「ドリー・パートン・イマジネーション・ライブラリー」という、就学前の子供たちが本に親しむためのプログラムを支援しています。

また、インドネシア日産自動車会社(NMI)は、ダットサン・ブランドとしては初のCSRの取り組みとなる「ダットサン・ライジング・ホープ」を展開しています。第1弾として、2015年1月から4ヵ月

間、ジャカルタ都市部や西ジャワ州ブルワカルタを回り、子供向けの古本や教育用のおもちゃを地域の子供たちに届けるために、ダットサン「GO+ Panca(ゴープラスパンチャ)」を移動図書館として活用しました。

モノづくりの魅力を伝える取り組み

(日本、英国、米国、南アフリカ、インドネシアなど)

日産は、モノづくりの楽しさや奥深さを将来世代に伝えたいと考え、さまざまな取り組みを行っています。日本では日産従業員が小学校を訪れ、モノづくりの魅力を伝える出張授業「日産モノづくりキャラバン」や「日産デザインわくわくスタジオ」を実施、両プログラム合わせて年間約2万名の子供たちに授業を届けています。英国でも、英国日産自動車製造会社(NMUK)が同社サンダーランド工場近隣の小学校を対象に「日産モノづくりキャラバン」を実施しています。

▶ 「日産モノづくりキャラバン」「日産デザインわくわくスタジオ」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶ website

NMUKは次世代のエンジニアを育てる取り組みを積極的に推進。英国クランフィールドにある日産テクニカルセンターと「Annual University Engineering Summit(大学エンジニアリングサミット)」を共同開催し、英国政府が推進するプログラム「See Inside Manufacturing(工場をのぞいてみよう)」にも参加しています。日産は英国における教育プログラムをさらに拡大し、エンジニアリングと製造部門の人財育成を促進するため日産スキルズ・ファンデーションを設立しました。ワークショップや競技会、モノづくり体験、工場見学ツアーなどを通じ、2年間で1万5,000人以上の若者が最先端の自動車デザイン、エンジニアリング、革

新的なモノづくりを体験します。日産が協賛しているフォーミュラ1レース活動も教育プログラムに活用されます。

その他にも、米国や南アフリカ、インドネシアなど多数の国で、車両やエンジンを大学や専門学校に教材として寄贈し、学生の知識や技術向上に貢献しています。



日産スキルズ・ファンデーションの事業として「日産モノづくりキャラバン」を実施(英国)

社会的なサポートを必要とする子供たちや若者への教育支援(ブラジル、中国、南アフリカ)

2014年に新工場が稼働を開始したブラジルでは、地域とともに発展することを目指し、日産が拠点を置く地域において、子供や若者への教育を支援し、地域の発展に寄与することを目的に「Instituto Nissan」財団を設立しました。同財団はブラジル日産自動車会社(NBA)が本社を置くリオデジャネイロや新工場が建設されたレゼンデ、同じくNBAが拠点を持つサンパウロなどで、就業準備の支援をはじめ、健康、環境、スポーツ等を含む幅広い子供向けプログラムを提供します。またレゼンデでは、生後3ヵ月から6歳までの就学前児童170人を対象とするデイケアを兼ねた施設を、リオデジャネイロ州の公共セクターとともに建設しました。

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

これは自動車業界では初めての試みです。2013年の設立以来、「Instituto Nissan」は46万5,000ドルの資金を活用し、2万3,905名を支援しました(2014年12月時点)。

日産(中国)投資有限公司(NCIC)は、2010年から実施してきた「日産ケアリング・フォー・マイグラント・チルドレン」を発展させ、2013年から貧困地区の小中学生を支援する新プログラム「ドリーム・クラスルーム」をスタートしました。この活動を通じて、2014年度は約4,428名の児童・生徒をサポートしました。

また、南アフリカ日産会社(NSA)は、巡回車両による眼科検診「モバイル・アイクリニック」により、2014年度は5,900名の児童を対象に検診を実施し、1,200個の眼鏡を提供するとともに、治療が必要な子供たちに医療機関を紹介しました。NSAは過去5年間同プロジェクトを運営し、社会的支援を必要とする子供たちの学習環境を大きく改善することに貢献しています。



移動式の眼科検診「モバイル・アイクリニック」(南アフリカ)

教育プログラム向上への取り組み

日産財団による理科教育支援(日本)

持続可能な社会の実現が地球規模で求められる中、日産財団は「未来に夢を持てる社会の実現を目指し、人材育成の機会創出に

貢献します」というビジョンのもと、人材育成事業に助成を行っています。事業のひとつの柱となるのが理科教育助成で、子供たちの科学的思考能力を向上させる教育を実践していたり、教師の理科指導力を向上させる授業研究を行ったりしている小中学校、研究会などが助成対象となります。2013年度には同プログラムの実践校を対象とした「理科教育賞」を創設しました。2年間の助成期間に多大な成果を上げ、かつ成果の波及効果が期待できる実践校へ授与されるもので、学校における理科教育の活性化を目指しています。

また、2014年度からは「科学的思考能力の高い子供を一人でも多く育成すること」を目指した「わくわくサイエンスナビ」を開始しました。小中学校の先生を対象とし、最先端科学研究施設を見学し、研究者と直接対話する機会を提供するとともに、それらを通して得た発見を授業に生かすためのワークショップを組み合わせた体験プログラムです。理化学研究所、東京大学生産技術研究所、早稲田大学先端生命医科学センターで実施しています。

日産財団の活動に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
 ▶▶ website

オックスフォード日産日本問題研究所による日欧相互理解促進(英国)

1981年、日産の寄付により英国オックスフォード大学内に設立された同研究所は、欧州における現代日本研究の主要拠点のひとつとして広く知られ、日欧の相互理解の促進に寄与しています。

オックスフォード日産日本問題研究所に関する詳細はウェブサイト(英語のみ)をご覧ください
 ▶▶ website

人道支援

日産は、世界各地で発生した大規模自然災害で被災された方々への支援を行っています。また、国際NGOハビタット・フォー・ヒューマニティとの協力関係を発展させ、新興国での新たな取り組みを開始するなど、人道支援分野での取り組みを拡大しています。

ハビタット・フォー・ヒューマニティとのパートナーシップ

日産は、2005年に米国南部を襲ったハリケーン「カトリーナ」の支援をきっかけに、NGOハビタット・フォー・ヒューマニティとの協働を始めました。同NGOは、貧困や災害などにより安全で清潔な住環境を得られない人々のために、住居の建設と改修を通じた支援を世界各地で行っています。日産は、「人々の生活を豊かに」という自らのビジョンに通じる同NGOの理念に賛同し、2012年にパートナーシップを拡大することを決定。北米および日本以外にも実施地域を拡大し、現地事業会社とその従業員もボランティアとして参加しながら、住居建設などの活動を行っています。



ベトナム日産の従業員ボランティアが住居の建設に参加(ベトナム)

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

2015年に工場建設を予定しているミャンマーでは、国際NGO ワールド・コンサーンと協働で、衛生状態の改善や災害に強いコミュニティ形成を目指す5年間のプロジェクトを継続しています。また、南アフリカでは、完成した50棟の家を贈呈する式典を行いました。さらに、ベトナム、タイ、インドネシアでも活動を継続し、各国の従業員がボランティアとして参加しながら、家屋の建設や修繕、災害に強いコミュニティ開発などに取り組んでいます。

ハビタット・フォー・ヒューマニティとのパートナーシップに関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶ website

東日本大震災への対応(日本)

従業員によるボランティア活動を実施

東日本大震災の被災地では、経済的な理由から震災で損傷した家屋の補修が行えない世帯がまだあります。日産は、今もお不安を抱えて暮らす方々の家屋修繕を行う従業員ボランティアツアーを、ハビタット・フォー・ヒューマニティと協働で2回実施しました。

被災した子供たちに笑顔を

「日産プレジデント基金」は、CEOであるカルロス・ゴーンが発起人となって2011年に発足しました。東日本大震災で被災した子どもたちの笑顔を取り戻すためのプログラムを実施しています。そのひとつ「あそびプラスOneプログラム」では、岩手県、宮城県、福島県の子供たちの日常的な遊び場である児童館を、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問し、独自のプログラムを

提供しました。また、「おでかけプログラム」では、長期休暇を活用し、県外での体験学習や遊びの場を提供しました。

「あそびプラスOneプログラム」「おでかけプログラム」に関する詳細はウェブサイトをご覧ください
▶ website

福島県双葉郡の8町村に「NV200 バネット」を寄贈

東日本大震災の復興支援として、福島県双葉郡の8つの町村に対し、多目的小型商用車「NV200 バネット」を1台ずつ、合計8台を寄贈しました。県内外に避難している方への行政サービスの提供に貢献しています。

その他の自然災害への対応

雲南省・四川省で発生した地震の被災地を支援(中国)

2014年8月3日に中国・雲南省で発生した地震で被害を受けた方々に対して、日産自動車株式会社(NML)は中国のNPO中国扶贫基金会(China Foundation for Poverty Alleviation)に200万人民币(3,300万円相当)を寄付しました。寄付金は、学校の修復や、被災地の児童が日常生活を取り戻し、再び学習に取り組める環境を整えるために活用されました。

また、2013年4月に四川省で発生した地震の被災地支援として、同団体に日産が寄付した資金を活用し、雅安市向陽小学校の新校舎が完成しました。仮校舎での学習を強いられていた子供たちに笑顔が戻りました。開校式では被災した子供たちに夢を与えたいと「日産モノづくりキャラバン」を開催しました。



雅安市向陽小学校の新校舎完成セレモニー(中国)

エボラ出血熱の流行に伴う支援(リベリア)

西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行に伴う支援として、NMLはリベリア共和国政府に救急車を寄贈しました。SUV「パトロール」をベースに、ストレッチャーや応急処置用品を装備したもので、同国の大統領府を通じて各地に配備されました。頑強なボディを誇る「パトロール」はアフリカの道路条件に最適で、医療従事者による支援を遠隔地まで届けることに貢献しています。

広島市大雨被害に対する支援(日本)

2014年8月、集中豪雨により発生した大規模土砂災害の被災者の支援および被災地の復興に役立ててもらうため、NGOジャパン・プラットフォームに支援金として500万円を寄付しました。

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシチズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

事業を営む地域への貢献

日産は、事業を行う地域の一員として、地域社会に積極的に
かかわり、地域の方々に愛される「良き企業市民」でありたい
と願っています。地域のイベントに協力するほか、清掃活動な
ど事業所周辺の環境を向上させる活動、自社施設の開放など、
さまざまな形で地域貢献活動を行っています。また、従業員も
ボランティアとして積極的に地域の活動に参加しています。

地域と協働で障がい者スポーツ大会を開催(日本)

2014年12月、第15回全国車椅子マラソンin横須賀「日産カッ
プ追浜チャンピオンシップ 2014」を地域関係諸団体との協働運
営で開催しました。本大会は、2000年より始まった車椅子陸上競
技の総合大会で、障がい者スポーツの普及と競技者の技術向上
のほか、地域の活性化と「やさしい街づくり」支援を目的としてい
ます。追浜工場内のテストコース「GRANDRIVE」と京浜急行追浜
駅間の公道を使用したロードレースでは、従業員ボランティアと
地域のボランティア約500名がコース整理を行いました。

また、神奈川県厚木市の日産テクニカルセンター(NTC)と日産
先進技術開発センター(NATC)では、清掃活動や地域のイベント
への協力など、さまざまな地域貢献を行う「NICE WAVE」活動に
取り組んでいます。2012年から視覚障がい者と健常者が一緒に
参加できるマラソン大会「日産ふれあいロードレース」を主催し
ています。「安全広々コースで思い切り走ろう」をテーマに、NTC
の構内を開放して実施しています。

次世代の科学者やエンジニアを育成する取り組み(米国)

日産は米国における教育の取り組みとして、小学校から大学ま
での学生たちが自動車産業に不可欠な、科学・技術・工学・数学
(STEM: Science、Technology、Engineering、Mathematics)の4
分野に親しむことを奨励するさまざまなプログラムを支援してい
ます。

日産の2つの主力工場があるテネシー州では、全米で開催され
るロボット競技大会「BEST[®] ロボティクス」のナッシュビル大会
をサポートしています。同大会では、学生チームが建材などの簡
単な材料でロボットを設計・製作し、3分間で与えられた課題に挑
戦します。2014年度は20名以上の従業員がボランティアとして
大会に参加し、出場チームを指導したり、競技審判を務めたりし
ました。リアルワールドで生じる技術的な問題を、プロジェクト
ベース型の大会で解決する体験は、学生の技術理解力を高め、
キャリアの方向性を描くための絶好の機会となっています。

▶ BEST: Boosting Engineering Science and Technology (「工学・科学技術の振興のた
めの」の意味)

また日産は、SAE財団および同財団が支援するプログラム
「ワールド・イン・モーション」とパートナーシップを提携。学力の
形成に重要な時期とされる小学3年生までの児童を対象に、科学
の基礎知識を身につけるためのカリキュラムの開発・普及を支援
しています。



米国テネシー州ナッシュビルで開催されたロボット競技大会「BESTロボティクス」の様子

目次・使い方	はじめに	CEOメッセージ	持続可能なモビリティ社会の実現に向けて	ブルーシズンシップ —日産のCSR—	ルノーと日産のアライアンス	CSRデータ集	第三者保証
環境	安全	社会貢献	品質	バリューチェーン	従業員	経済的貢献	コーポレートガバナンス・内部統制

ステークホルダーからのメッセージ

変化への想像力を刺激

近年、中国は驚異的な発展を遂げていますが、その一方でいまだに8,200万人以上の人々が貧困に直面しています。中国扶貧基金会 (CFPA) は、貧困削減に取り組む中国で最大の慈善団体です。

1989年に設立されたCFPAは、その功績により中国政府の民政部から5A[▶]の団体として2度表彰を受けています。私たちは、合理的な方法論に基づき着実にプログラムを運営し、かかわる人々が高い水準で貢献すれば、確かな成果を収めることができると信じています。また、CFPAの活動を通じて多くの人々に影響を及ぼすことは、結果的に、より多くの人々が他の人々の困難な状況を改善することにつながると考えます。良い行いが広まり、人々のアイデアと想像力が刺激されるのです。

長年にわたって、私たちはさまざまなプログラムを生み出し継続してきました。そのひとつが2002年の「ニュー・グレートウォール・プロジェクト」です。このプロジェクトでは、500の学校に在籍する約1万2,000名の生徒たちが高等教育を受けるための手助けをしました。2009年には、教育に必要なアイテムが詰まった通学かばんを生徒たちに提供し、教師増員を支援する「ケア・パッケージ・プロジェクト」を開始し1万校270万名の生徒をサポートしました。

2011年には、「スクール・ドミトリー・プロジェクト」を実施し、貧しい農村地域にある191の学校のために学生寮を建設。さらに、農村部で小規模な事業を営む人々を助けるため、「マイクロファイナンス・プロジェクト」も行いました。

2012年に、私たちは日産(中国)投資有限公司(NCIC)と共同で、4つの学校へ奨学金と備品を提供する「日産 ケアリング・フォー・マイグラント・チルドレン」プログラムを行いました。2013年には、これを発展させ、NCIC、東風日産乗用車公司(DFL-PV)、鄭州日産汽車有限公司(ZNA)と連携して「ドリーム・クラスルーム」プログラムを開始しました。小学生たちに自信を与えるよう設計されたカリキュラムには、災害から身を守るための訓練や、アウトドアでの体験学習による自己啓発プログラム、自己の成長や社会的交流を促すコースなどが含まれています。

私たちは日産と協力する中で、日産の社会へのかかわりや社会貢献活動の取り組みを高く評価し、また細部への気配りや問題解決に対する配慮に感銘を受けました。今後も、「ドリーム・クラスルーム」プログラムなどの教育への取り組みにおいて、日産と協働できることを楽しみにしています。

▶ 中国民生部が社会組織団体に与える格付けで、5Aは最高評価にあたる



中国扶貧基金会
(China Foundation for
Poverty Alleviation)
資源開発部
企業連携推進室 室長
朱 峰氏